

「廃材の利用と社会連携に関する一考察—津軽地区リンゴの木の間伐材を利用して—」

馬場拓也

本論文では、整枝・剪定と同じ時期に行われる、間伐という仕事があり、その際に出る間伐材に着目し、木材としての可能性を検討した。青森県の農地において栽培されている野菜や果実は、さまざまであるが、中でも特に有名なのがリンゴである。青森県のリンゴの生産量は、全国生産量の約半数を占めている。中でもリンゴ栽培が盛んな地域として、津軽地方が有名である。青森県津軽地方では、古くからリンゴの栽培が盛んに行われてきた。明治初期頃に始まり、生産者の様々な努力によって良質なリンゴを栽培してきた。また、同時に津軽地方独自の栽培方法などか次々と生み出された。

リンゴの栽培は、まず、リンゴの樹の整枝・剪定から始まる。1月から3月にかけて、リンゴの樹に質が良く多くの実が成るようにするためには、大事な作業工程の一つである。この整枝・剪定は、15年で一人前と言われるほど、熟練の経験と技術が必要な仕事である。整枝・剪定は、たくさんの枝が切られ、一部は農家の方々が薪として使用するが、ほとんどが処分される。そこで、その切られた枝を、使用し材料として活用できないかと考えた。

しかし、リンゴの樹の枝は、さまざまな形で存在し、同じものは二つとなく、機械によって、加工・製材することが難しい。そこで、間伐という作業に注目した。間伐という作業は、リンゴの樹の主幹から切るため、木材となる丸太を入手することができる。そのため、木工所などの機械加工によって、ある程度の長さや大きさをもつ板材や角材に製材してもらうことが可能である。しかし、現在の青森県のリンゴ園では、「矮化型」と「丸葉型」の2種類の樹形が主に存在する。「矮化型」とは、作業の省力化を図るため欧州から移入されたものであり、樹を大きくせず密植させる栽植方法である（主幹・太い幹が30cm程度であるため）。一方、「丸葉型」とは、「まるっぱ」と呼ばれる大きな太い幹から2～3本の主幹を張り出して樹形を成すものである。「矮化型」「丸葉型」のように材料として活用する上で、適している樹形や、そうでないものを検討した。また、「リンゴの木は、リンゴのなる木でしかない」という言葉があるように、リンゴの樹を間伐するときには、いくつかの条件があり、リンゴの樹を利用した間伐材の安定した供給に問題があることがわかった。また、間伐された樹の多くが、薪として用いられている。そうした現状にあることを把握できた。しかし、一方で、間伐した後の用途が決まっていない、リンゴ園も存在していることが分かった。